

人種の観念はアメリカにおけるセグリゲーション統計でふつうに利用されているが、フランスでは歴史的に正統とは思われていない民族分化の基準に依拠することは非常にまれである。しかしこの限定的な種類の統計を学術目的にのみ作成することを求める声が最近になって高まった。いかなる統計もその意義を検証することができないのであれば、民族レベルのセグリゲーションや差別について語ることはできないのは明らかである。社会住宅へのアクセスにおける人種・民族差別の問題はしばしば解決すべき特別な問題として提起されてきた。2001年5月のGELDの報告書は以下のように指摘した。「住宅市場における移民の従属的な立場を考慮すると、社会住宅地区のうち最も魅力の少ない部分に彼らが入居していると予想することができる。都市空間の社会的分極化は民族・人種セグリゲーションによって倍加し、それは社会住宅地区においても同じことが観察される。移民やそのように考えられる人びとの集中の可視性は、地区やHLM[低廉家賃]住宅の価値を象徴的に低下させることを強める」(GELD,2001,p.31)。SIRS調査では対象者の出生国ばかりでなく、彼らの両親の出生国に依拠している。この場合はいわゆる民族的出自よりもむしろ出身国が問題となる。こうして四つのカテゴリーを区別することができた。1) 対象者とその両親がフランスで出生した場合は「フランス人」と考える。2) 対象者がマグレブ[アルジェリア、チュニジア、モロッコなどの北アフリカ]諸国で出生あるいはフランスで出生したとしても少なくとも両親の一方がマグレブ諸国で出生した場合に「マグレブ出身」と考える。3) 対象者がサハラ以南のアフリカ諸国で出生した場合、もしくはフランスで出生しても少なくとも彼らの両親の一方がサハラ以南のアフリカ諸国で出生した場合には「サハラ以南のアフリカ諸国出身」と考える。4) 「その他」のカテゴリーに属すると考えられる人びと。労働者タイプの地区のなかには、われわれが定義する意味での「フランス」出身の人びとの割合は、モンフェルメ地区の3.3%からヴィルジュイフ地区の57.4%まで多様であるために、非常に幅が大きい。多くの庶民地区(10地区のうち7地区)では、サンプル全体で観察されたフランス出身の人びとの割合(54.5%)とは明らかに異なっている。したがって、フランス国籍をもっているけれども外国出身、とくにマグレブもしくはサハラ以南のアフリカ出身の人びとがこれらの地区に集中するかなり顕著な傾向について語ることはできる。しかしアメリカの黒人やヒスパニックのゲットーのように同質的な民族構成から成り立つ地区はひとつもないことに注意しておこう。このことは現在述べられている主張を確認するものである(Wacquant, 1992, 2006)。

貧困の水準は、ある地区のセグリゲーションの水準を評価するために一般的に考慮される指標である。パリ地域の庶民地区で行なわれた多くの観察によって、われわれはこの指標が住民の経済問題の全体をカバーするわけではないことを確認できた。非常に多くの負債を抱えているけれども貧困線以上の世帯が存在する。他の世帯は年によって所得が顕著に変動しているために、調査時点の静態的な測定は不確かな結果を提供することになっている。こうした理由のために、われわれは、住民自身による自らの状況の主観的評価をもとに経済的困難を測定している。予想されたように、困難な状況に直面していると考えられる住民の割合は、サンプル全体で見られた割合よりも労働者タイプの地区で顕著に高い。この割合は、サンプル全体では12.2%にたいして、バニョ地区で28.3%、イル・サン・ドニ地区とサン・ドニ地区では25%に達している。この設問への回答の分布が

サンプル全体に近いヴィルジュイフ地区を除くと、すべての庶民地区は重度の経済的困難に直面した世帯が顕著に集中する傾向がある。

空間的セグレーション指数を計算するために、これらの三つの変数（不就労・失業とフランス以外の出身国、経済的困難）を統合し、この結合にたいして十分なクロンバックの $\alpha$ 係数がえられた（0.85、表2参照）。

### 分断と内部闘争指数

地区の分断と内部闘争にもとづく第二のタイプの断絶を測定するためには、統計的にまったく適切な指標にアクセスすることはもっと困難である。ある地区の社会関係はしばしば複雑であり、ウィンストン・パーバでエリアスとスコットソンが行なった調査のように、研究者がフィールドに長期間かかわるモノグラフ的な特徴をもつ質的アプローチによってしか、詳細にそれを理解し評価する研究を行なうことはできない。反対に、SIRS調査で提起した設問のいくつかは、地区内の分断と内部闘争、とりわけ社会的分裂感や物理的あるいは口頭の暴力にもとづく問題をおおまかに評価するために考慮することができる。

社会的類似性は社会学的に非常に古い問題にもとづいている。デュルケムはすでに1893年に博士論文『社会分業論』で社会的類似性の基準をもとに機械的連帯を定義していた。機械的連帯は、諸個人がそれほど分化しておらず、同じ感情を共有し、同じ信念や価値にしたがっている伝統的社会に対応する。住民に質問した主観的項目（「あなたは、自分の地区に住む人たちと似ていると思いますか」）から、対象地区における社会的類似性あるいは反対に社会的分裂を測定することができる。他の住民とどちらかという違う、あるいはとても違うと考える対象者の割合は、労働者タイプの複数の地区でとりわけ高い。それはサンプル全体で30.3%にたいして17区の地区では55.2%、クーヌーヴで51.8%である。この割合が最も低い地区はイル・サン・ドニの地区である（15%）。住民の大多数に全体から孤立し離れていると思われるこの地区は、村落共同体の様式で組織されているように思われる。

つぎにSIRS調査から犠牲化の統計を検討しよう。利用できるデータは地区内の物理的もしくは口頭の暴力に関するものである。おそらくその前の指標よりも明白なこの指標は、地区住民間の緊張を表わしている。過去二年間でこの種の暴力の犠牲に遭ったと申告した人びとの割合は、サンプル全体では平均10%であったのにたいして、労働者地区のいくつかの地区では25%に達している。該当する住民の割合はいくつかの地区でとくに高い。サンプル全体で17.1%にたいして、モンフェルメの地区で35%、クーヌーヴで32.8%、17区で26.7%であった。

われわれが計算した分断と内部闘争の指数はこれら三変数を統合している（分裂、物理的・口頭の暴力の犠牲、物理的・口頭の暴力の目撃）。この指数に関するクロンバック $\alpha$ 係数も十分なものであった（0.81、表2参照）。より一般的に、第二のタイプの断絶を測定するために考慮された指標のすべてを参照したとき、庶民地区の多くにこのプロセスの影響があることは明らかであるようだ。実際に、そこでは社会的類似性の感情はサンプル全体と比べて低いように見えるのは意外なことだ。先に検討した空間的セグレーション指標をもとに主張できたように、これら庶民地区の住

民は大まかにはかなり同質的であることを考えると、ここで働くプロセスは、スティグマを与える  
と判断された集合的な均等化をまぬがれるための分断や差異の再構成に属している。そのさいこれ  
は、分断と内部闘争によって特徴づけられる傾向のある社会関係の存在を表わしている。犠牲化の  
指標はこの意味で、それを強調することによってこれらの地区の多くに広まる同じ治安悪化の雰囲気  
に満ちているのである。

### 近隣の社会的紐帯の弱さの指数

地区内の社会的紐帯の弱さの指標のなかでも、まずは地区内における家族の成員や友人ネットワ  
ークの存在の程度を考慮することができる。それから民族もしくは宗教的「コミュニティ」への帰  
属と宗教実践は、外国出身の家族が同じ地区に住むことが多いときには、ある地区住民間の社会関  
係と社会的紐帯の評価を豊かにすることができる。これらの仮説は、デュルケムにつづいて、自殺  
を社会的に説明するためにアルブヴァクスが提起した仮説と関連している。「家族の感情と宗教  
実践——われわれはその意義を誤認や過少評価してはならない——は、慣習とあらゆるタイプの社会  
組織の全体——そこから家族感情と宗教実践はその力を部分的に引き出しており、それらを分離さ  
せることはできない——と連帯している。それがわれわれの生活様式と呼ぶものであり、われわれ  
がより包括的な社会環境に家族と職業集団を置くもの——それらはさまざまな側面のひとつでしか  
ない——によってのみ、われわれはデュルケムとは異なる」(Halbwachs, 2002, p. 7)。

地域の家族・周囲(famille-entourage)という観念は、1990年のINEDの「近隣と親族」調査のデ  
ータから最近になって精緻化された。フランス人を代表する1946名のサンプルにたいして実施さ  
れたこの調査の目的は、個人と親族ネットワークとの紐帯を分析することであった。この調査の責  
任者は、以下の三つの基準から地域の家族・周囲を定義した。つまり、同じあるいは隣接市町村に  
居住する親族と少なくとも週一度コンタクトをとること、また彼らとサービスや援助を交換するこ  
とである(Bonvalet, 2003)。この調査によれば、回答者の30%がこの状況にあり、この結果はしば  
しば主張される、家に閉じこもる一般的な傾向という主張を相対化している。このアプローチは、  
すでに1950年代から当時T・パーソンズが支持していた核家族化の説に異議を唱えることに貢献  
した、M・ヤングとP・ウィルモット(1957)の有名な調査を引き継いでいる。

SIRS調査を利用するなかで、われわれはINEDの研究者が定義した地域の家族・周囲の定義に  
反論しようとはしなかった。[しかし]参照としている空間的観念——この場合には市町村——は、わ  
れわれの分析には適切ではないと思われた。反対に、対象者と居住していないが地域に家族の成員  
が居住するという問題は、われわれにはそれ自体は的確なものだと思われた。意外なほどの対照性  
が労働者タイプの地区を含む地区間に存在している。複数の地区はサンプル全体で観察された傾向  
と顕著に異なるわけではないが、二つの地区ではそれと明白に異なっていた。ここではクーヌーヴ  
の地区とモンフェルメの地区が問題となる(それぞれ対象者の45.9%と50%が地区に家族の成員  
がひとりもいないと回答している。このことはサンプル全体の割合76.6%と比較して少ない)。地  
域の家族・周囲は、まさしく現代の庶民地区においてなおも観察することのできる現実であるが、  
このタイプの地区の特徴が問題になっているわけではないと強調せねばならない。同じ親族ネット

ワークの成員が同じ地区にいるとしても、これらの住民が集まる意思の直接的な効果ばかりでなく、彼らに向けられた家族のまとまりという直接的あるいは潜在的な要求を認める社会的賃貸人[社会住宅の運営者]の決定の効果もそこに見なければならぬ。

地区に友人がいることは、地域の社会生活に住民が関わっていることを示す指標である。自分の友人に頼り、大事にされることは、おそらく地域的距離に完全に条件づけられているわけではないが、この紐帯が容易に活性化されるほど、友情関係をもつ人びとがたがいに近隣で生活し、規則的に会うことができるということはかなり筋が通っているように思われる。このことが、SIRS 調査で質問した設問の意味である。「世帯員以外で、あなたの友人のなかに同じ地区に住んでいるひとはいますか」。対象住民のうち地区内に友人のいない人の割合は、サンプル全体で 53.6%にたいして、17 区の地区 (67.3%)、クリシィ-スー-ボワの地区 (62.1%)、ヴィルジュイフの地区 (61.7%)、バニョの地区 (61.2%) でとくに高い。反対にクーヌーヴやモンフェルメのような地区は、緊密な友人との社交性によってより特徴づけられる (それぞれ住民の 25.9%と 29.1%が地区に友人がいない)。

民族・宗教帰属の基準を考慮することは、地区内の社会的紐帯の強度を評価するために必要である。庶民地区には外国出身家族が多く住むが、民族構成は非常に多様だという特徴があることは前に見た。予想されたように、この点では地区ごとに大きな違いが存在する。民族・宗教共同体に所属している感情を回答した対象者の割合が最も高いのは、モンフェルメの地区とクーヌーヴの地区である (サンプル全体で 28%にたいして、それぞれ 58.3%と 57.4%)。イル-サン-ドニの地区でも割合が高く、そこでは 48.3%に達している。民族・宗教共同体への帰属の割合が最も低いのはボンディ-レ-フリシュの地区である (11.7%)。

宗教実践は貧困の抵抗形態となりうる。現在では南欧諸国とアイルランドで規則的な宗教実践が他の国よりも顕著に高いことが知られている。宗教実践は、フランス人は 11%、スウェーデンが 9%であるのにたいして、ポルトガルとギリシャで約 50%、アイルランドで 60%である。同様に、南欧諸国とアイルランドでは、所得が最も貧しい[第 I]四分位階級に対応する人びとで宗教実践の割合が高いだけでなく、それは他の四分位階級、とくに第 IV 四分位階級に所得が対応する人びとよりも顕著に高い。したがって経済発展のなおも低いこれらの地方的伝統をもつ国や地域では、貧困には宗教が根づいている。北部諸国に比べて南欧諸国の特徴は、最も貧しい層のなかでは同じ境遇を二重に分かち合う人びとが顕著に多いことである。そこでは貧困は拡散している。貧困は個人の意識にはそれほど浸透しておらず、また集団のなかで、とりわけ宗教実践によってより容易に軽減される(Paugam, 2005)。貧困地域では、宗教実践はいわば貧者の地域共同体への帰属形態を与えているのである。この現象はパリのような大都市の庶民地区においても存在するのだろうか。ある種の庶民地区においては、規則的な宗教実践の割合がとりわけ高い。それはサンプル全体では 19.7%であるのにたいし、クーヌーヴでは 55.7%、モンフェルメでは 53.3%に達する。つまり外国出身の家族の割合が最も高い二つの地区において高いのである。サン-ドニの地区 (38.3%)、クリシィ-スー-ボワの地区 (36.7%)、イル-サン-ドニの地区 (31.7%) でも同様に割合が高い。反対に、ヴィルジュイフ、バニョ、ボンディ-レ-フリシュの地区では割合が低い。最初の二種の

断絶によって影響を受ける地区においては、最も貧しい人びとにとって宗教実践が社会統合の要因となっていると言えることができる。宗教実践は、特定タイプの社会的紐帯を守る形態として働いているのである。

近隣の社会的紐帯の弱さの指数は、四項目をまとめている（地区内の家族成員なし、地区内の友人なし、共同体的帰属なし、宗教実践なし）。作成した他の二つの断絶指数と同様に、十分なクロンバック  $\alpha$  係数がえられた（0.8、表2参照）。

表2：断絶指数のまとめ

断絶指数	変数	クロンバック・テスト	偏差	平均
空間的セグリゲーション	1. 不就業/失業 2. 出身国 3. 経済的困難	0.85	[0.11-0.51]	0.25
分断と内部闘争	1. 分裂 2. 暴力の犠牲 3. 暴力の目撃	0.81	[0.10-0.43]	0.21
近隣の社会的紐帯の弱さ	1. 地区内に家族成員なし 2. 地区内友人なし 3. 共同体的帰属なし 4. 宗教実践なし	0.83	[0.38-0.81]	0.66

SIRS 調査の対象となったさまざまな地区は、われわれが確定し測定した三つのタイプの断絶によって同じように、また同じ強さで影響を受けているわけではない。イル-サン-ドニの地区はその独自性が現れている。強い空間的セグリゲーションによって特徴づけられているとしても、この地区は、強い村落様式と特殊な内輪[の論理]にもとづいて、内的分断と社会的紐帯の解体に抵抗する。反対に二つの地区、つまりバニョと 17 区の地区は三つのタイプの紐帯に影響を受けているように思われる。以下では、結果を先取りすることはしないが、心理的苦悩のスコアが最も高い地区も問題となることが明らかになるだろう。

## 5. 結果

われわれが統合指数をもとに定義し測定したような——三種の断絶と心理的苦悩のあいだに関連が存在するだろうか。下の図はこの問題にたいする最初の回答を与える。セグリゲートされた地区は心理的苦悩と関連するだろうか。図1によって、「労働者」タイプの地区が最もセグリゲートされていると同時に心理的苦悩と最も関係していると述べることができる（図1の右上の部分）。反対に、「上流」タイプの地区は、少なくとも取り上げた指標をもとにすれば最もセグリゲーションの程度が低いと同時に、おおよそは高い心理的苦悩スコアからまぬがれている。「中間」タイプの

地区は、当然のように中間的な位置を占めている。しかし、この図の対角線上の列は完ぺきではなく、したがって例外が存在していることに注意しよう。イル-サン-ドニのような「労働者」タイプの地区は、たとえば相対的に高い空間的セグレーションの水準と低いスコアの心理的苦悩という特徴をもっているのである。

図 1

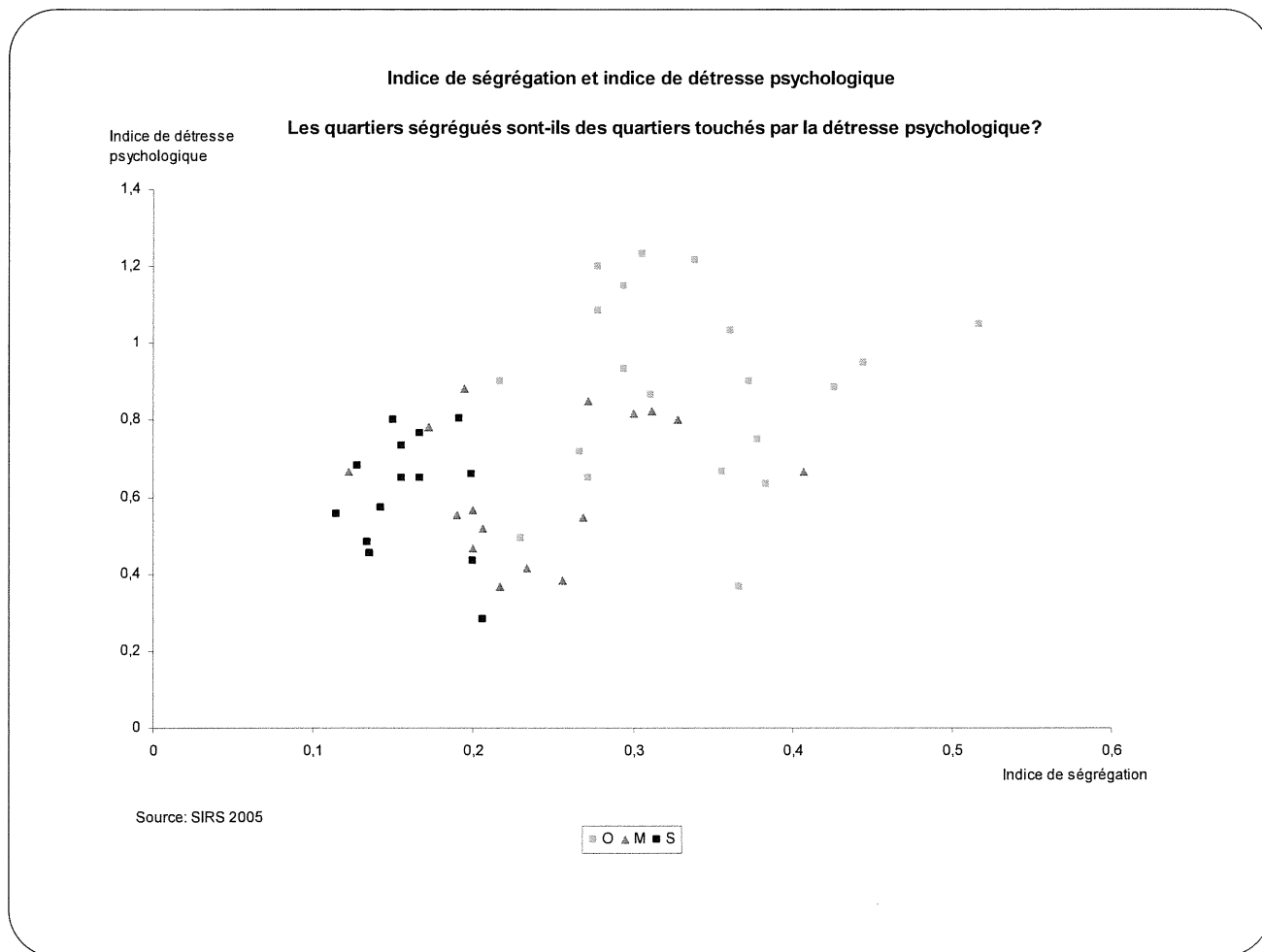
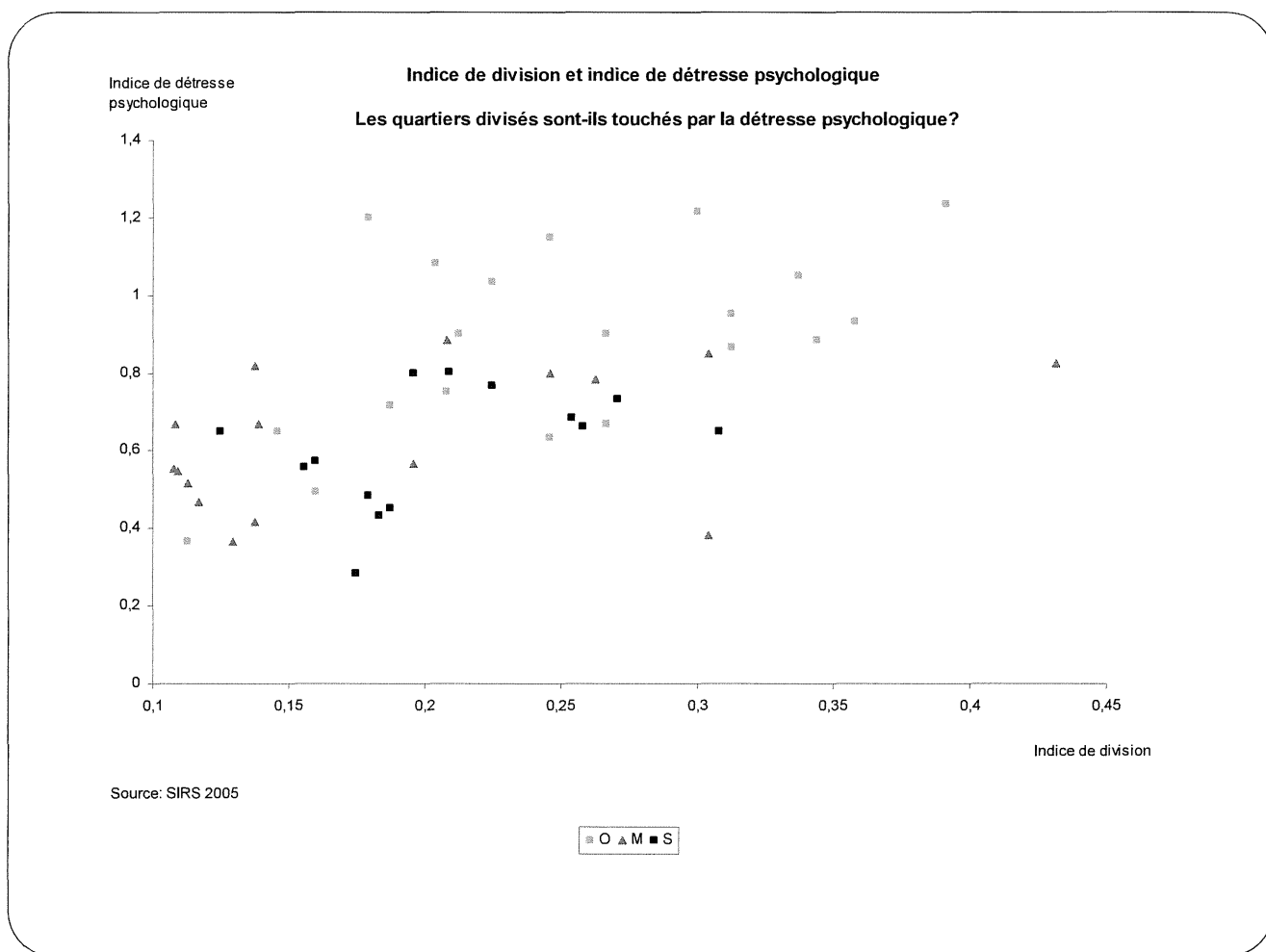


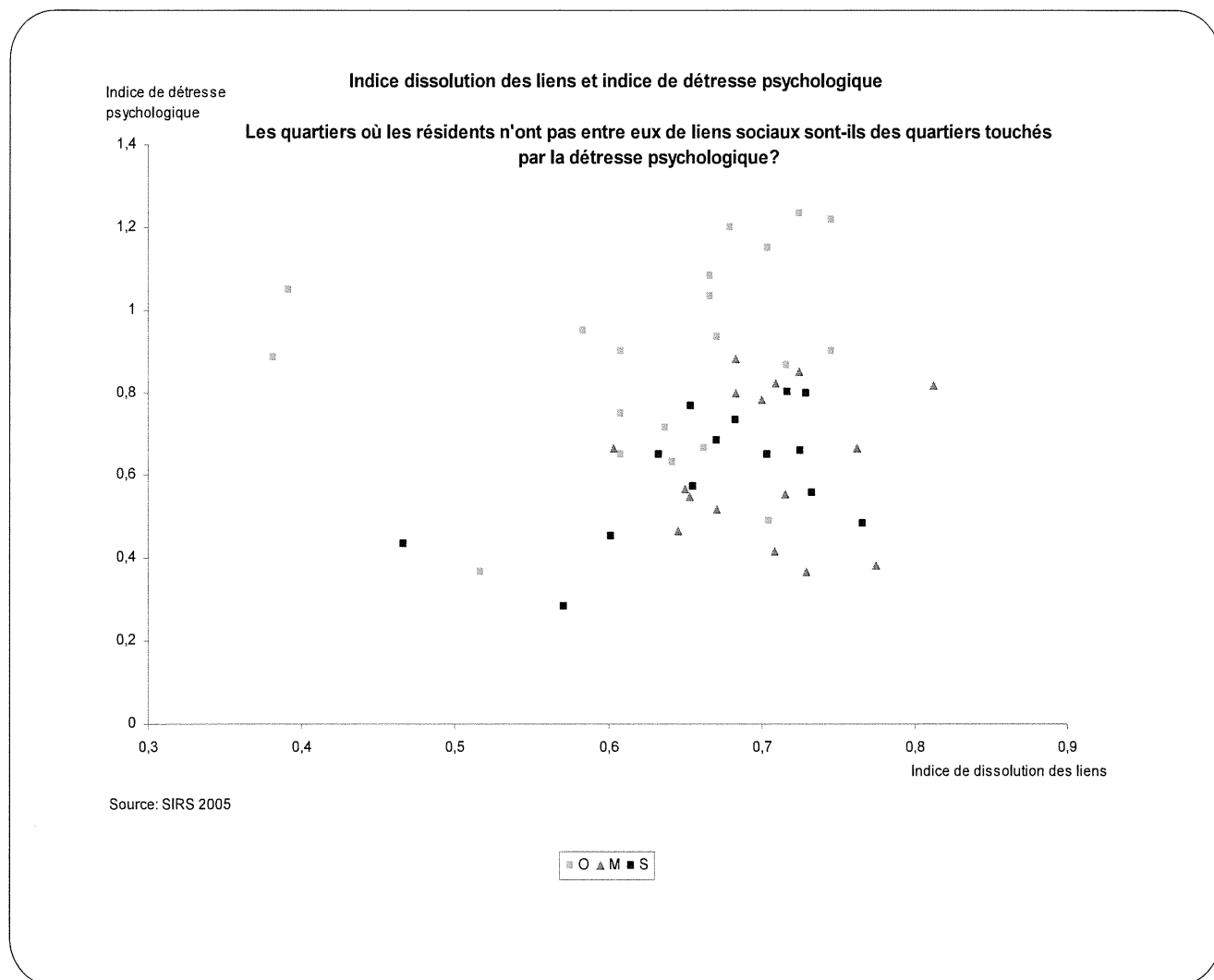
図2によって、地区が分断し内部闘争によって特徴づけられるほど、その地区は心理的苦悩の影響を受ける傾向もあると強調することができる。したがって、第二のタイプの断絶は、第一の断絶とまったく同様に、検討された現象と関係があるように見える。しかしまさに、その論理はただちにより複雑なものであることに注意しよう。異なったタイプの地区はより混合しているように思われる。それはつねに、最も高い分断指数と最も高い抑うつスコアを蓄積した労働者タイプの地区であるとしても、数多くの例外が存在する。中間タイプの地区も実際に同じく分断され心理的苦悩と関係しており、上流タイプの地区もまた、この図ではもはや、全体として他の地区と対照的な位置にいるわけでもないのである。

図 2



最後に図3はさらに異なった配置となっている。近隣の社会的紐帯の弱さは、ここでは心理的苦悩との関係は非常に弱いようだ。多くの地区は、心理的苦悩スコアを表す軸とほとんど垂直に並んでいるが——このように地区間にある偏差を表している——、その位置は、社会的紐帯の弱さにかんしてかなり類似してさえいる。同じく、「上流」タイプと「中間」タイプの複数の地区は、近隣の社会的紐帯の弱さによって特徴づけられると強調せねばならない。ここでは、エリートが地区のなかで内輪を求めることを過小評価する必要はないにしても(Pinçon, Pinçon-Charlot, 1989)、おそらくは地区外へと社交性が開かれているという意味でジンメルの大都市の定義にかなり近い。

図 3



実際に、図1と2だけで、都市的断絶のタイプと心理的苦悩との統計的な関連の確率を検証することができる。このことは後でマルチレベル分析のモデルをもとに提示する。三タイプの断絶のうち、第三番目の社会的紐帯の弱さはほとんど説明力をもたないように思われる。このことは、少なくとも自殺の社会学——とりわけ生活様式の地域効果に関するアルブヴァクスの仮説——で知られた



結果から引き出した仮説にもとづかならば、一目見ると意外である。しかし社会的紐帯の弱さに有意な効果が見られないことから性急に結論を引き出す必要はない。実際にこれら三種の断絶は、いかにして調査対象となった地区のなかで蓄積しえないのかを検討する必要があるのだ。

表3 最もセグリゲートされた労働者タイプ地区における都市的断絶と心理的苦悩

地区	自治体	空間的セグリゲーション指数	分断・内部対立指数	社会的紐帯の弱さ指数	心理的苦悩スコア
10	Paris17e	<b>0,30</b>	<b>0,39</b>	<b>0,72</b>	<b>1.23</b>
36	Montreuil	0,31	0,31	0,72	0.86
15	Bagneux	0,34	0,30	0,74	1.21
18	Colombes	0,35	0,27	0,66	0.66
42	Bonneuil-sur-Marne	0,36	0,22	0,67	1.03
30	Ile-St-Denis Villeneuve-St-	<b>0,37</b>	<b>0,11</b>	<b>0,52</b>	<b>0.36</b>
50	Georges	0,37	0,27	0,61	0.90
40	Saint-Denis	0,38	0,21	0,61	0.75
26	Clichy-sous-bois	0,38	0,24	0,64	0.63
27	La Courneuve	<b>0,43</b>	<b>0,34</b>	<b>0,38</b>	<b>0.88</b>
39	Saint-Denis	0,44	0,31	0,58	0.95
32	Montfermeil	<b>0,52</b>	<b>0,34</b>	<b>0,39</b>	<b>1.05</b>
標本平均		0.25	0.21	0.66	0.72

出所：SIRS 調査 2005

表3によって、最もセグリゲートした労働者タイプの 11 地区で都市断絶の三つのスコアと心理的苦悩スコアを比較することができる（0.30 以上あるいはそれと同スコア）。断絶が一貫して蓄積されているわけではないのは意外である。イル・サン・ドニの地区は、分断と内部闘争（指数値はサンプル全体で 0.21 にたいして 0.11）と同じく社会的紐帯の弱さ（指数値はサンプル全体で 0.66 にたいして 0.52）をもっているように思われる。このことはこの研究を進めるなかで実施した質的なモノグラフ調査が確認したことである。ところがこの地区は心理的苦悩スコアが最も低い地区である（サンプル全体で 0.72 にたいして 0.36）。さらに、最初のふたつの断絶の影響を強く受けた地区は、三つ目の断絶からは離れているようだ。それは、クーヌーヴとモンフェルメにある地区のケースである。そこでは社会的紐帯の弱さの指数が非常に弱い（サンプル全体で 0.66 にたいして 0.38 と 0.39）。そこでは苦悩スコアはイル・サン・ドニの地区よりも高いが、サンプルのなかで最も高い値に達しているわけではない。これらの地区は、この地区を支配する暴力のせいで評判が非常に悪いのである。これらの地区では対立と敵対性が規則的に現れ、抗争的な特徴をもつ社会関係が生じている。しかし、人びとが感じるとる解体と疎外にさいして、アイデンティティによる抵抗を行なうことに成功する住民もいる。それは、共同体的な基盤にもとづく集合形態を地区内に創出することによって、またこれによって家族や民族、宗教による連帯、つまり類似性による連帯を強めることによって抵抗が行なわれるのである。最後に、分断指数と社会的紐帯の弱さの指数が最も高い（0.39）パリ市 17 区に位置する地区もまた心理的苦悩のスコアが最も高い（1.23）地区でもある。このように、最もセグリゲートした地区は同質的ではまったくなく、これらの紐帯の蓄積と

心理的苦悩のあいだに関連が存在しているように思われる。しかしこれらの関連はマルチレベルモデルを利用して体系的に検討する必要がある。

表4は心理的苦悩を説明するための七つのマルチレベルモデルである。これらのモデルは、個人変数と文脈変数を同時に考慮している。個人変数では、性別と年齢、教育水準、婚姻状況、雇用状況、（民族という意味で。上記参照）出身国、つまり記述社会学の古典的な変数を投入した。サンプルの約半数が不就労であったために、社会職業分類は投入しなかった。さらに世帯収入を考慮しなかった。それは第一に、調査で重みづけした恵まれない地区ではとくに、世帯収入はそれほど信頼性が高いわけではないからである。また第二にこの変数は教育水準や従業上の地位と非常に強く相関しているためである。

地区の文脈変数では、われわれの当初の仮説に合わせて、空間的セグレーション指数、分断・内部闘争指数、社会的紐帯の弱さ指数を投入した。さまざまなモデルが、探求された文脈効果によって区別される。これらのモデルそれぞれが投入した個人変数全体を考慮するとき、最初の三変数は三種の断絶とは別に検討している。モデル4は最初の二つのタイプの断絶の関連を考慮しており、モデル5は第二のタイプと第三のタイプの関連、モデル6は第一のタイプと第三のタイプの関連、最後のモデル7は三種の断絶すべてを検討している。

モデル7では、心理的苦悩を有意に説明する個人変数はとくに性別であり、女性は男性よりも影響を受けやすいことがわかる。教育水準も同じく有意な変数である。心理的苦悩のリスクは教育水準が低いほど高まる傾向があり、最も学歴が低いと最も心理的苦悩のリスクが高いようだ。また離別・死別による婚姻上の断絶は、予想されたように、重要な説明要因となっていることにも注意しよう。この現象には自殺と同じく社会的原因があるようだ。最後に、心理的苦悩は失業者と不就労者により影響を及ぼす。このように、性別、教育水準によって把握された社会経済的地位、就労状況、婚姻状況は、心理的苦悩の説明に最も寄与する個人変数である。このことはすでに他の多くの研究で主張された傾向を確認している(Mirowsky, Ross, 2003)。反対に、この分野の古典的研究によると抑うつはUカーブを描く——抑うつはまず18歳で高く、その後低下して40歳から55歳のあいだで最も低くなり、それから人生の終わりまで規則的に上昇する——が(Mirowsky, Ross, 2003, p. 113)、SIRS調査では年齢は有意な変数ではなかった。われわれの調査でこの年齢効果に関連がなかったとしても、就労年齢で労働市場から遠ざかったままのキャリア環境にある人びとが重みづけされた影響を考える必要がある。最後に、出身国もまた有意な変数ではなかったことに注意しよう。

つぎに文脈変数の効果を検討しよう。モデル1では係数が正で有意である(0.71)。これによってある地区の空間的セグレーションの程度それ自体が、すでに述べた個人変数の効果を越えて、補完的な心理的苦悩の要因であることがわかる。モデル2の係数も正で有意で(1.32)、これは第二種の断絶を検証している。反対にモデル3の係数は正であるが(0.28)、有意ではない。言い換えると、ある地区における社会的紐帯の弱さは心理的苦悩の説明要因と考えることはできない。ある地区の住民は、彼らの居住地を越えて重要な社交性をもっているために、他の住民とそれほど関係を

もたないことがある。これら最初の三つの変数は、上の図には表わされていない傾向を確認していることに注意しよう。

表4：心理的苦悩の説明要因（マルチレベルモデル）

	モデル1		モデル2		モデル3	
	断絶効果1		断絶効果2		断絶効果3	
	B.	Sig.	B.	Sig.	B.	Sig.
定数	.01	Ns	-.08	Ns	.02	Ns
個人変数						
性別						
男性	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>
女性	.30	****	.29	****	.29	****
年齢						
	.00	Ns	.00	Ns	.00	Ns
教育水準						
なし	.33	***	.35	***	.37	***
初等	.18	***	.20	***	.21	***
中等	.17	****	.19	****	.20	****
高等	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>
婚姻状況						
既婚	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>
独身	.10	Ns	.09	Ns	.10	Ns
死別	.37	****	.37	****	.37	****
離別	.36	****	.35	****	.36	****
雇用状況						
就労	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>
失業・不就労	.20	****	.21	****	.22	****
出身国						
フランス	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>
外国	-.01	Ns	-.01	Ns	-.00	Ns
地区文脈変数						
空間的セグリゲーション指数 (1)	.71	**	-	-	-	-
分断・内部闘争指数 (2)	-	-	1.32	****	-	-
社会的紐帯の弱さ指数 (3)	-	-	-	-	.28	Ns

出所：SIRS調査2005

(\*)：P<0.1, \*\*：P<0.05, \*\*\*：P<0.01, \*\*\*\*：P<0.001, ns：有意差なし

(1)断絶1：以下の結合から計算：1) 不就労/失業、2) 経済的困難、3) 出身国

(2)断絶2：以下の結合から計算：1) 分裂、2) 暴力の犠牲、3) 暴力の目撃

(3)断絶3：以下の結合から計算：1) 地区内家族成員なし、2) 地区内友人なし、3) 共同体的帰属なし、4) 宗教実践なし

表4 (続き)

	モデル4 断絶効果 1と2		モデル5 断絶効果 1と3		モデル6 断絶効果 2と3		モデル7 断絶効果 1と2,3		
	B.	Sig.	B.	Sig.	B.	Sig.	B.	Sig.	
定数	-13	Ns	-63	**	-35	Ns	-65	**	
個人変数									
性別									
男性	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	
女性	.29	****	.30	****	.29	****	.30	****	
年齢	.00	Ns	.00	Ns	.00	Ns	.00	Ns	
教育水準									
なし	.33	***	.33	***	.36	***	.33	***	
初等	.18	***	.17	***	.20	***	.18	***	
中等	.18	****	.17	****	.20	****	.18	***	
高等	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	
婚姻状況									
既婚	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	
独身	.09	Ns	.10	*	.09	Ns	.10	Ns	
離別	.36	****	.37	****	.37	****	.36	****	
死別	.36	****	.36	****	.35	****	.35	****	
雇用状況									
就労	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	
失業-不就労	.20	****	.21	****	.21	****	.21	****	
出身国									
フランス	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	<i>Réf.</i>	
外国	-.01	Ns	-.01	Ns	-.00	Ns	-.00	Ns	
地区文脈変数									
空間的セグリゲーション指数(1)	.29	Ns	1.08	***	-	-	.63	*	
分断・内部闘争指数(2)	1.19	****	-	-	1.34	****	1.09	***	
社会的紐帯の弱さ指数(3)	-	-	0.83	***	0.39	Ns	.68	**	

出所: SIRS 調査 2005

(\*) : P&lt;0.1, \*\* : P&lt;0.05, \*\*\* : P&lt;0.01, \*\*\*\* : P&lt;0.001, ns : 有意差なし

(1) 断絶1 : 以下の結合から計算 : 1) 不就労/失業、2) 経済的困難、3) 出身国

(2) 断絶2 : 以下の結合から計算 : 1) 分裂、2) 暴力の犠牲、3) 暴力の目撃

(3) 断絶3 : 以下の結合から計算 : 1) 地区内家族成員なし、2) 地区内友人なし、3) 共同体的帰属なし、4) 宗教実践なし

最初の二タイプの結合を分析するモデル4は、一見すると意外な結果である。第一の断絶の効果は、その係数が正であっても(0.29)有意ではなくなっているが、反対に第二の断絶の効果は非常に強く有意なままである(係数 1.19)。したがって心理的苦悩を説明するのはセグリゲートした地区で生活すること自体ではなく、分断・内部闘争が社会関係を特徴づけているセグリゲートされた地区で生活することである。このことは、われわれが確認できたようなセグリゲートされた労働者タイプの地区ではありふれたことなのである(後の表3参照)。

第一と第三のタイプの断絶を関連させたモデル5も同様に興味深い結果を提供している。なぜなら、そのとき空間的セグリゲーションの効果は、社会的紐帯の弱さの効果と同様に(係数 0.83)、強く有意だからである(係数 1.08)。第三タイプの断絶は別のモデルで分析したとき(モデル3)には説明力をもたなかったようだが、反対に第一タイプの断絶と関連するときには説明力をもっている。したがってこの結果から、セグリゲートされた地区では、近隣の社会的紐帯をもたないことは心理的苦悩を増加させる要因になると結論づけねばならない。反対に、住民間の社会的紐帯が緊密であるセグリゲートされた地区は、心理的苦悩の増加要因からまぬがれていると付け加えることができる。住民が空間的セグリゲーションという条件のなかでときおりまぬがれ、さらに増幅させることのできる関係的資源を考慮すべきである。それはわれわれが確認できたような、無視できないある種の地区に住民が住んでいるからである。

第二タイプの断絶を第三タイプの断絶と関連させたモデル6は、一見するとより解釈の難しい結果である。そこでは分断と内部闘争の効果はつねに強く有意であるが(係数 1.34)、社会的紐帯の弱さの効果は(正であるが)有意ではなくなっている。これまで見てきたように、第二タイプの断絶には、「中間」・「上流」タイプの地区を含む多くの地区が関わっている。第二タイプと第三タイプの断絶の関連は、そこで心理的苦悩を分析するためには、ただちにありそうだとはいえそれほど思われぬ。なぜならこれらの地区住民はしばしば、地区に限定されない社会的紐帯をもっており、モデルはそのことを考慮していないからである。

最後に、三タイプの断絶を結合したモデル7は総合となっている。この組み合わせでは、三つのタイプの断絶のそれぞれは、心理的苦悩に正で有意である(それぞれの係数は 0.63、1.09、0.68)。したがってそこから、セグリゲートされた地区では、分断と内部闘争ばかりでなく社会的紐帯の弱さが、[心理的苦悩を]悪化させると考えられる説明要因になっていると結論づけることができる。反対に、自分の地区内で社会的分裂の傾向と社会的紐帯の断絶の傾向をともに回避するための資源を見出すことのできるセグリゲートされた地区は、心理的苦悩のリスクを顕著に低下させると言えるだろう。たとえばわれわれのサンプルではイル・サン・ドニの地区、つまり孤立しセグリゲートしているが、歴史的に共産党が進出している地区がそのケースである。この地区では、現在は比較的高齢化しているものの、左翼の共感者や彼らの地区を尊重する家族に支援された運動家たちが、つねに住民全体とりわけ若者たちにたいして一定の社会統制を維持し、多くの郊外地域に関わる主要な傾向を「村」と彼らが呼ぶものを保護することに成功しているのである。

## 結論

われわれは、ひとつの要因ではなく、三タイプの都市的断絶と関連する要因すべてを検討することによって、心理的苦悩の社会的原因を探求しようと試みた。北アメリカの研究者たちは、ウィルソンの研究につづいて、住民の疎外の要因としてのゲットーの社会解体をとりわけ強調してきた。このアプローチは、空間的セグリゲーションの現象と、ある都市区域における貧困と失業状況にある黒人の集中効果、多様な形態の暴力と治安悪化を引き起こす社会関係の内的悪化現象を明確に分別していないという欠点がある。そのためそれはたいていの場合最も貧しい人びとが犠牲となる社会的原因に属するはずのものと、反対に恵まれない都市区域に住むある種の個人の逸脱行動にもとづくであろうものを区別することが困難となる。さらに地区の社会解体はそれが不可避免的に社会的紐帯を解体させることになるとう理解しているために、疎外を蓄積させるポイントであると暗黙に考えられてきた。ところが、分断と内部闘争という意味での社会的分裂——それは、社会解体という表現が生み出す誤解とイデオロギー的な偏向のゆえに、その表現にはほとんど不可避免的なリスクがあるために、社会解体よりもわれわれが好んだ表現である——においては、社会的紐帯の解体は一貫したものではなく、まったく正反対であったことを指摘した。最終的にわれわれは、地区の社会的分断の上には無視しえない構造的要因が存在し、このプロセスの下には自閉へといたる社会関係のさらに進んだ悪化の可能性が存在することを強調した。このように、われわれが心理的苦悩の「文脈的」要因を検討したのは、ひとつのタイプの断絶ではなく、三タイプの断絶においてなのである。

分析の結果、これら三種の断絶のそれぞれが同じように、また同じ強さで心理的苦悩に寄与しているわけではないと強調することになった。個々に取り上げると、第一と第二の断絶だけ、つまり空間的セグリゲーションと分断・内部闘争が心理的苦悩に有意な効果をもっている。社会的紐帯の弱さは、「文脈」変数としては、他の二タイプの断絶とは独立した説明要因となっているわけではない。反対に、第一のタイプ、あるいは第一と第二の両方を統制したモデルでは、社会的紐帯の弱さは心理的苦悩に有意な効果をもっている。このことから、最も恵まれない地区を含む地区は、抑うつ傾向のリスクの影響が非常に不平等であると結論づけねばならない。しかし強くセグリゲートされたいくつかの地区は、凝集性を促進する社会統制を住民に行使することによって集団的防衛を動員するが、反対に他の地区は、地区の分断に直面して狼狽し規範的規制の解体からまぬがれることができない。セグリゲートし分断した地区のいくつかは、地域や家族、共同体、宗教による統合様式を強化することによって社会的紐帯の解体に抵抗するが、他の地域は自閉化の一般的な傾向と、内輪のなかで社交性を探し求めることをいっさい放棄せざるをえない。こうして、これらの結果によって、不平等があり空間的セグリゲーションが大きな都市的文脈においては、一方で規範的規制の地域的な能力と他方で地区レベルの社会的紐帯の交差は、心理的苦悩への抵抗形式となっているという結論にいたるのである。

(川野英二・中條健志訳)

## Bibliographie

Autier J.-Y., Bacqué M.-H., Guérin-Pace F., 2006, *Le quartier. Enjeux scientifiques, actions publiques et pratiques sociales*, Paris, La Découverte, 2006.

Bacqué M.H., Fol S., 2006, « Effets de quartier : enjeux scientifiques et politiques de l'importation d'une controverse » in Autier J.-Y., Bacqué M.-H., Guérin-Pace F., *Le quartier. Enjeux scientifiques, actions publiques et pratiques sociales*, Paris, La Découverte, p. 181-193.

Body-Gendrot S., 1993, *Ville et violence. L'irruption de nouveaux acteurs*, Paris, PUF, coll. « recherches politiques ».

Bonvalet C., 2003, « La famille-entourage locale », *Population*, 48<sup>ème</sup> année, n°1, p. 9-43.

Bourdieu P., 1993, « Effets de lieu » in *La misère du monde*, Paris, Seuil, 1993, pp.159-167.

Chamboredon J.C. et Lemaire M., 1970, « Proximité spatiale et distance sociale. Les grands ensembles et leur peuplement », *Revue française de Sociologie*, XI, 1, p. 3-33.

Donzelot J. et al., 2003, *Faire société. La politique de la ville aux Etats-Unis et en France*, Paris, Seuil, coll. « La couleur des idées ».

Donzelot J., 2004, « La ville à trois vitesses : relégation, périurbanisation, gentrification », *Esprit*, 3-4, p. 14-39.

Drake, St. C., Cayton H.R., 1945, *Black Metropolis. A Study of Negro Life in a Northern City*, Chicago, The University of Chicago Press.

Dubet F. et Lapeyronnie D., 1992, *Les quartiers d'exil*, Paris, Le Seuil.

Duncan, C., Jones, K., and Moon, G., 1995, "Psychiatric morbidity: a multilevel approach to regional variations in the UK", *Journal of Epidemiology and Community Health*, 49(3), 1995, p. 290-295.

Elias N., Scotson J.L., 1965, *The Established and the Outsiders*, Londres, Franck Cass and Co (traduit en français sous le titre *Logiques de l'exclusion. Enquête sociologique au coeur des problèmes d'une communauté*, Paris, Fayard, 1997)

Faris R.E.L, Warren Dunham H., 1939, *Mental Disorders in Urban Areas. An ecological study of schizophrenia and other psychoses*, Chicago, The University of Chicago Press.

Foret C., 1986, *Trajectoires de l'exclusion. Recomposition sociale et processus de territorialisation dans l'espace d'une copropriété disqualifiée*, CNAF (Programme de recherche : logement, habitat, conditions de vie des familles).

Gans H.J., 1962, *The Urban Villagers. Group and Class in the Life of Italian-Americans*, New York, The Free Press, (Nouvelle édition augmentée, 1962).

GELD (Groupe d'étude et de lutte contre les discriminations), 2001, *Les discriminations raciales et ethniques dans l'accès au logement social*, Note de synthèse N°3 du GIP GELD.

Grafmeyer Y., 1994, « Regards sociologiques sur la ségrégation », in J. Brun et C. Rhein (dir.), *La ségrégation dans la ville. Concepts et mesures*, Paris, L'Harmattan.

Grafmeyer Y. et I. Joseph (éd.), 1979, *L'école de Chicago. Naissance de l'écologie urbaine*, Paris, Aubier.

Halbwachs M., 2002, *Les causes du suicide* (1<sup>ère</sup> édition 1930), Paris, PUF « Le lien social ».

Jargowsky P. A., 1997, *Poverty and Place. Ghettos, Barrios, and the American City*, New York, Russell Sage Foundation, 1997

Klinenberg E., 2002, *Heat Wave. A Social Autopsy of Disaster in Chicago*, Chicago, The University of Chicago Press.

Kokoreff M., 2003, *La force des quartiers. De la délinquance à l'engagement politique*, Paris, Payot.



Lagrange H., « « Ethnicité » et déséquilibres sociaux en Ile-de-France » in H. Lagrange (dir.), *L'épreuve des inégalités*, Paris, PUF, « Le lien social, 2006, p. 247-314.

Lagrange H. et Oberti M. (dir.), 2006, *Émeutes urbaines et protestations. Une singularité française*, Paris, Presses de Sciences-Po.

Lapeyronnie D., 2008, *Ghetto urbain. Ségrégation, violence, pauvreté en France aujourd'hui*, Paris, Laffont.

Lazarsfeld P., Jahoda M., Zeisel H., 1933, *Marienthal: The Sociology of an Unemployed Community*, London, Tavistock (traduction en français : *Les chômeurs de Marienthal*, Paris, Editions de Minuit, 1981).

Lepoutre D., 1997, *Cœur de banlieue. Codes, rites et langages*, Paris, Odile Jacob.

Marpsat M., 1999, « La modélisation des 'effets de quartier' aux Etats-Unis. Une revue des travaux récents, *Population*, vol. 54, n°2, p. 303-330.

Massey D. S. et Denton N. A., 1988, *American Apartheid. Segregation and the Making of the Underclass*, Cambridge, Harvard University Press (traduction française sous le même titre, Descartes et Cie, 1995).

Maurin E., 2004, *Le ghetto français. Enquête sur le séparatisme social*, Paris, La République des Idées/Seuil.

Merklen D., 2009, *Quartiers populaires, quartiers politiques*, Paris, La dispute.

Mirowsky J., Ross C.E., 2003, *Social Causes of Psychological Distress*, New York, Aldine De Gruyter (2nd edition)

Mohammed M., 2011, *La formation des bandes de jeunes*, Paris, PUF, « Le lien social ».

Oberti M., 2007, *L'école dans la ville. Ségrégation, mixité, carte scolaire*, Paris Les Presses de Sciences Po.

Paugam S., 1991, *La disqualification sociale. Essai sur la nouvelle pauvreté*, Paris, PUF, huitième édition avec une préface inédite « La disqualification sociale, vingt ans après », coll. « Quadrige » 2009.

Paugam S., 1995, « L'habitat socialement disqualifié », in François Ascher (éd.), *Questions d'habitat, continuités et ruptures*, Paris, Editions de l'Aube, p. 213-234.

Paugam S. et Van Zanten A., 2001, « Constructions identitaires et rapports sociaux dans une cité défavorisée de la banlieue parisienne » in Dominique Schnapper (ed), *Exclusions au coeur de la Cité*, Paris, Anthropos, pp. 19-68.

Paugam S., 2005, *Les formes élémentaires de la pauvreté*, Paris, PUF, « Le lien social ».

Pétonnet C., 1979, *On est tous dans le brouillard. Ethnologie des banlieues*, Paris, Ed. Galilée.

Pinçon M., Pinçon-Charlot M., 1989, *Dans les beaux quartiers*, Paris, Ed. du Seuil.

Pinçon-Charlot M., Preteceille E. et Rendu P., 1986, *Ségrégation urbaine. Classes sociales et équipements collectifs en région parisienne*, Paris, Anthropos.

Préteceille E., 2003, *La division sociale de l'espace francilien*. Paris, Fondation nationale des Sciences Politiques, CNRS.

Préteceille E., 2006, « La ségrégation a-t-elle augmenté ? La métropole parisienne entre polarisation et mixité », *Sociétés contemporaines*, 62, p. 69-91.

Préteceille E., 2006, « La ségrégation contre la cohésion sociale : la métropole parisienne » in H. Lagrange (dir.), *L'épreuve des inégalités*, Paris, PUF, « Le lien social », p. 195-246.

Lagrange H., 2006, « Ethnicité » et déséquilibres sociaux en Ile-de-France » in H. Lagrange (dir.), *L'épreuve des inégalités*, Paris, PUF, « Le lien social », 2006, p. 247-314.

Reijneveld, S.A., and Schene, A.H., 1998, "Higher prevalence of mental disorders in socioeconomically deprived urban areas in The Netherlands: community or personal disadvantage ?" *Journal of Epidemiology and Community Health*, 52 (1), p. 2-7.

Ross, C.E., 2000, Neighborhood disadvantage and adult depression. *Journal of Health and Social Behavior*, 41, p. 177-187.

Ross, C.E., Mirowsky, J., 2001, "Neighborhood disadvantage, disorder, and health", *Journal of Health and Social Behavior*, 42(3), p. 258-276.

Ross, C.E., Reynolds, J.R., Geis, K.J., 2000, "The contingent meaning of neighborhood stability for resident's psychological well-being" *American sociological review*, 65, August, 2000, p. 581-597.

Sauvadet T., 2006, *Le capital guerrier. Concurrence et solidarité entre jeunes de cité*, Paris, Armand Colin.

Selim M., 1982, « Rapports sociaux dans un quartier anciennement industriel. Un isolat social », *L'Homme*, XXII, 4, p. 77-86.

Silver E., Mulvey E.P., & Swanson J.W., 2002, "Neighborhood structural characteristics and mental disorder: Faris and Dunham revisited", *Social Science and Medicine*, 55(8), p. 1457-1470.

Simmel G., 1979, « Métropoles et mentalité » (1<sup>ère</sup> édition 1903) in Grafmayer Y. et I. Joseph (éd.), *L'école de Chicago. Naissance de l'écologie urbaine*, Paris, Aubier.

Simmel G., 1999 « L'entrecroisement des cercles sociaux » in G. Simmel *Sociologie. Etudes sur les formes de la socialisation*, Paris, PUF, coll. « Sociologies ».

Vallée J, Cadot E, Roustit C, Parizot I, Chauvin P. The role of daily mobility in mental health inequalities: the interactive influence of activity space and neighbourhood of residence on depression. *Soc Sci Med* 2011,

Van Zanten A., 2001, *L'école de la périphérie. Scolarité et ségrégation en banlieue*, Paris, PUF « Le lien social ».

Vieillard-Baron H., 1991, « Ghettos » dans les banlieues ? », *Etudes*, tome 375, n°3, p. 179-190.

Wacquant L., 1992, « Banlieues françaises et ghetto noir américain : de l'amalgame à la comparaison », *French Politics & Society*, 1992, vol. 10, 4, pp. 81-103.

Wacquant L., 2006, *Parias urbains. Ghetto, banlieues*, Etat, Paris, La Découverte.

Wainwright, N.W., Surtees, P.G., 2004, "Places, people, and their physical and mental functional health", *Journal of Epidemiology and Community Health*, 58(4), p. 333-339.

Weich, S., Twigg, L., Holt, G., Lewis, G., and Jones, K., 2003, "Contextual risk factors for the common mental disorders in Britain : a multilevel investigation of the effects of place", *Journal of Epidemiology and Community Health*, 57(8), p. 616-621.

Wilson W.J., 1987, *The Truly Disadvantaged*, 1987, (traduit en français sous le titre : *Les oubliés de l'Amérique*, Paris, Desclée de Brouwer, 1994.)

Wirth L., 1980, *Le ghetto*, 1<sup>ère</sup> édition en anglais 1928, Grenoble, Presses Universitaires de Grenoble.

Young M., Willmott P., 1957, *Family and Kinship in the East London*, Routledge (nouvelle édition en français sous le titre *Le village dans la ville. Famille et parenté dans l'Est londonien*, Paris, PUF, « Le lien social ». 2010).